“解りやすく、乗りやすい　－　地域と人を結ぶバス案内”

高齢者や初めて来訪する観光客にも解りやすいように、起点・経由地・終点地域の数値化や路線の色分けをして表記する。

１．背景・目的

8 月の政権交代により、鳩山新政権では、温室効果ガス排出量を 2020 年までに 1990 年比で 25%削減する地球温暖化対策基本法案が通常国会に提出される見通しであり、今後の“環境対策”に注目が集まっている。また、高齢化社会の到来により、ユニバーサルデザインを取り入れた“高齢化対策”も重要である。

本稿では、公共交通利用は、マイカー利用により発生する温室効果ガス(CO^2/人･km)の約 1/3 であることに着目し、バス利用へのソフト施策による環境と高齢化対策をキーワードとして提案を行う。

２．現在のバス路線及び便名の課題

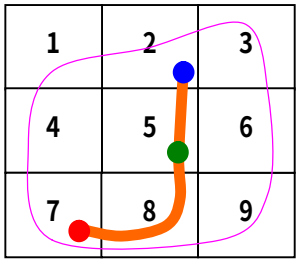
現在のバス路線及び便名は、地域名で表記されており、初めて来訪する観光客には解りづらく、特に日本語に不慣れな外国の人は“どこに向かう(連れて行かれる)”のか不安になるものである。このように、深刻化するバス離れの要因の１つに“解りづらさ”が関係しているのではないだろうか。

３．新しいバス路線及び便名の表記の提案

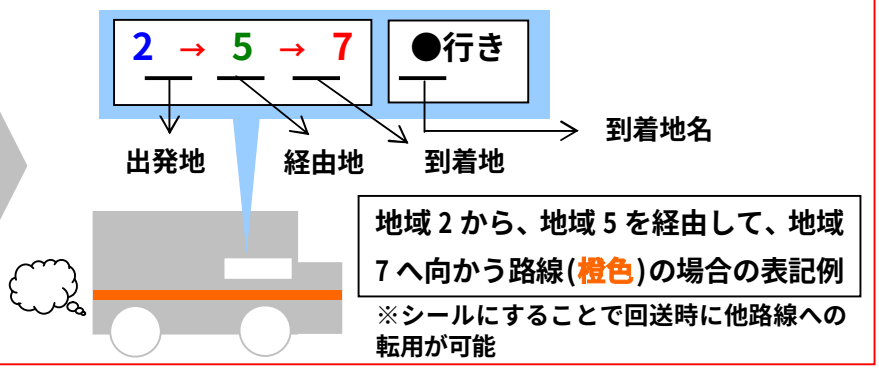
本提案の先駆的取り組みを行っているソウル市(韓国)では、出発地域－到着地域－車両番号という表記でバスの便名が整理されている。しかし、これでは経由地までは解りづらく、路線の区別が難しい。

そこで、本提案では以下のような表記の仕方を提案する。

対象となるエリアを例えば 0.5km ごとに番号で表し、その番号を出発地－経由地－到着地で表記する。また、路線毎に色分けをし、車両に色分けしたシールを貼る。世界共通である数字と色でバス路線を管理することで、高齢者や初めて来訪する旅行者及び外国人観光者等に適切な利用案内が可能となるのではないだろうか。



▲数値化して整理した地域図



本稿では、利用者サイドの“解りづらさ”を解消することで、マイカーからの転換及び利用者数の増加に伴う温室効果ガスの削減や観光集客数の増加による地域活性化を狙う。さらに、高齢化社会を迎える中、地域の足としてのバス交通を維持する上で本稿のような公共交通利用促進策は有用である。

また、外国人は、地下鉄等の軌道交通機関ではよく見られるものの、バス等で見られることは皆無である。本当に見たい街並みや人の生活を地下鉄等の高速で移動する軌道交通機関で観光するには無理があり、バス等でゆっくりと景色を楽しむことこそ、求められているのではないだろうか。

４．実現に向けた今後の課題

本提案の実現に向けた課題としては、3 点挙げられる。①既存の案内板・紙面の更新費用、②新表記に伴う新たな案内情報の整備・広告費、③バス停及び路線のナンバリング、色分けなど。